研究ノート 啓蒙主義における二項対立

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 志田, 絵里子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000248

ヨーロッパ文化史研究　第 25 号
（2024 年 3 月 31 日）

研究ノート

啓蒙主義における二項対立

志　田　絵里子

1　はじめに―問題の所在
2　政治領域における二項対立
3　宗教領域における二項対立
4　教育領域における二項対立
5　むすびにかえて―思想史的示唆

1　はじめに―問題の所在

歴史学者の D. ウートラムは，ベルリンの牧師ツェルナーの言葉を引用して，「啓蒙とは何か」という問いにいまだ明確な解答がなく，「啓蒙」を定義づけることがいかに困難であるかを指摘している［ウートラム 2017：2］。ウートラムによってまとめられている，「啓蒙」についての議論の系譜を素描しておく。そもそも「啓蒙」はカントによって定義づけられながらも，既に「逆説的な状況」を指摘されていた。すなわち「人間が無制限に考える」ことによって起こりうる危険や矛盾が予想されていたということである。啓蒙主義の代表的論者であるルソー，ディドロ，ヴォルテールらによる当時の教会権力との対峙から生じた「啓蒙」の推進の時代を経ると，啓蒙主義を俯瞰的に捉える時代に移行していく。例えば，カッシーラーによる哲学的な「啓蒙」についての研究が進んだのち，ホルクハイマーやアドルノ，フーコーらによって「近代そのもの」の定義として「啓蒙」が把捉されるようになると，「啓蒙」は時代を規定する象徴的な概念と認識され，その否定的な側面が語られるようになる。一方で，ハーバーマスのように「啓蒙」の潜在的な可能性を肯定的に捉える議論もあり，ウートラムは，「啓蒙」についての議論の複雑な状況の到達点について，「一元化した世界の創出を啓蒙思想の構造と統合しようと試みたものはほぼいない」と指摘している［ウートラム 2017：3–13］。

また，「啓蒙」は国によっても変遷の経緯が異なっている。まず，フランスでは王政に対する抵抗を支えた思想でもある「人間理性への信頼」によって啓蒙主義が生まれ，モンテスキューやルソーの影響により推進された［阪上 1998：423］。ドイツでは 30 年戦争による影響などにより，フランスより遅い時期に人間の精神的な成長を目指し，哲学・芸術

等の発展とともに啓蒙主義が起こった。カントによる「未成年状態から脱却する」という「啓蒙」の定義づけにも，人間性の確立が「啓蒙」の根底を形成していることがわかる［石川 1998：423–424］。イギリスでは，17 世紀ごろからイングランドによって支配されていたことを背景としたスコットランド啓蒙思想が起こり，「富と徳性」についての研究が進み道徳哲学が展開された［泉谷 1998：424–425］。

さらにいえば，政治，宗教，教育の各領域内で「啓蒙」の影響に関わる二項対立が生じている。政治領域では富永茂樹が「革命によって旧い社会制度はいったんは崩壊する。しかしその残骸のなかから，否定された君主制にもまして絶対的で中央集権的な権力が立ち上がってくる」と述べるように［富永 2011：277］，権力を抑制するだけでは解消されない，無制限の自由による新たな独裁の脅威がある。宗教領域では，神の存在が否定されたことにより，「超越的なものによって支配されるという他律の構造から，自律の構造への移行」が起こり［北垣 2011：307］，どこまで信条の自由を認めるかという問題が生じる。教育領域では，田中毎美が「啓蒙の野蛮化」がもたらす「パトスの消尽と非人間化」を回避すべく「祈りとしての啓蒙」という生き方を提唱している［田中 2021：13–15］ことから，次のことが読み取れる。つまり，教育的圧力からの脱却後に待ち受ける，野放図とは異なる自由に向けての啓蒙主義の再定義の必要性が生じている[1]。

このような，社会的な抑圧からの解放を無限に認めることで生じる社会的不安の危険性という矛盾を内包する「啓蒙」の議論に内在する複雑性については，佐藤淳二による次の指摘を参照すべきであろう。

> 〈啓蒙〉は対象に関する知を集積するだけではなく，その知をわれわれ自身に関わらせる自己回帰する反復である。〈啓蒙〉の進展は，個人では背負いきれない文化と文明の歴史的重荷からの解放を意味すると同時に，自己による自己の創造という自己言及のパラドクス，フーコー『狂気の歴史』のいう「人間学的循環」を深刻なものとする。［佐藤 2011：554 括弧は著者］

すなわち，「啓蒙」は人間を従来の社会的な束縛から解放するという自由への可能性を開くと同時に，何も依拠すべき地点を持たない不定形な自己を基に，新たな自己像の形成を促されるという苦悩へと人間を導いてしまう。「啓蒙」された人間が，新たな自己を創出

---

(1)　「啓蒙」自体を分析することと，「啓蒙」についての議論を分析することを同一視することはできないが，「啓蒙」の定義が困難であるという状況からも，それらは相互に浸透している。

するために頼るべき自己という存在に見るべき要素がなく空疎なものであったことを知り，自己というものがそれ自体では何も生み出すことができないという恐怖に直面することになる。つまり，「啓蒙」をめぐる議論の複雑さはこのような「啓蒙」を構成する要素の両義性に起因しているといいうる。

啓蒙主義における解放と新たな抑圧という二項対立については，既に議論し尽されたという見方もできるが，留意すべきことは，いずれの二項対立に関する議論も，社会的事象の影響の強さによって変化するという面を有しており，本来の「啓蒙」に備わっている内在的な哲学的要素が見えにくくなっているのではないかと考えられることである。カッシーラーは，なぜ「啓蒙」の哲学的性質を研究しなければならないのかについて，「哲学はもはや自然科学，歴史，法学，政治学等々から分離され得ない。哲学はこれらすべての個別的学問をいわば生気づける精気であり，これによって初めて個々の学問は，自らの存在と機能を保証されるであろう」と述べる［カッシーラー上 2003：13］。つまり，各学問分野に影響を及ぼしてきた「啓蒙」の哲学的含意を検討しなければ，これを内在させて成立している各学問分野の「啓蒙」的な側面についても理解することは不可能ともいえるのである。そのためには，啓蒙に内包される二項対立から導出される矛盾が，思想的内在性に関わる事項であるのか，現象として表出した社会的事象であるのかを区別する必要がある。

そこで，本稿ではこのような問題意識に基づき，政治・宗教・教育の各領域についてそれぞれ二項対立の状況を概観したうえで，さらにそれらの対立項が啓蒙主義の内実を形成する思想的な事柄に関わるものであるのか，表出した現象に関わるものであるのかを確認したのち，啓蒙主義の思想史的な示唆を探り出すことを試みる。思想史的な示唆を明らかにするためには，啓蒙思想を構成する哲学的要素について検討する必要がある。次節以降では，啓蒙主義においていかなる対立があるのかについて，政治・宗教・教育の各領域ごとに確認し，その対立に内在する哲学的問題群を整理し（2〜4），啓蒙主義における二項対立から得られた思想史的示唆を明らかにする（5）。

2　政治領域における二項対立

既に述べたように，啓蒙主義が生まれた背景の一つに君主による専制に対する抵抗がある。フランス革命のように君主制への抵抗が極限に達し，個人の自由を獲得する道が開かれた場合を見ると，確かに抑圧からの解放は一時的には達成されたかもしれない。しかし，上述の佐藤が述べるように，革命後の新たな価値観の形成は困難を極める。すなわち，何

らかの規範を定立したとしても，この規範や秩序の保持と実現のために結局は公的機関による保障が必要となり，新たな抑圧への危険性が生じる。そして「啓蒙」の観念に基づき，新たな抑圧に対する抵抗がさらに生まれ，社会は常に不安定となる。これはウートラムによれば，「君主制自体と啓蒙改革の計画との関係に本来備わっている緊張」であるとされている［ウートラム 2017：57］。つまり，社会の安定のための「専制」となりうる政治的制度はすべて，啓蒙主義により必然的に脅かされることとなる。そして啓蒙主義は，個人の理性の行使を無限に認めることを含意しているため，「「批判」，つまり合理性の使用はどのくらい進めてもよいのか。この人間の普遍的な特徴とされるものを行使することは，誰にどの程度許されるのか。」という問題が生じる［ウートラム 2017：58］。

このように，政治領域における啓蒙主義で生じた二項対立は，現行の政治体制に対する批判すなわち，啓蒙主義に裏付けられた個人の主張はどこまで認められ，実現可能であるのかという，啓蒙主義によって成立したはずの政府による社会の安定のための政策と，常に啓蒙主義によって自由へと導かれる感情を鼓舞されている個人との対立である。なぜこのような対立が起こるのかといえば，いずれの側も，社会の安定や個人の自由という正当な目的に基づく主張をしており，いずれか一方のみが正しいという判断をすることは不可能であるからである。これは，かつては神によって保障されていた，判断のための高次の審級が啓蒙思想によって瓦解されていることの帰結でもある。

そこで，政治的な現実問題，換言すると啓蒙主義によって現れ出た社会的事象ではなく，政治的二項対立を生み出す内在的な背景となった啓蒙主義における哲学的な要素に着目してみたい。政治的な二項対立を生む哲学的要素としては権力の正統性の根拠が挙げられる。つまり，民衆による批判対象としての政治権力について，そもそも政治権力に正統性を付与している存在は何かが問題となる。既に述べたように，近代まではキリスト教によって政治権力に正統性が与えられていたが，近代以降に個人の権利が認められるようになると，政治権力の正統性は，ルソーが提唱した「社会契約」に代表されるような個人の理性に基づくことが要求される。そうだとすると，今度は個人の理性は単に「啓蒙主義」に基づくという理由のみにより正統性を有するということになり，「啓蒙」自体の定義づけが明確に行わなければ，議論は膠着状態に陥る。

しかしながら，このような権力の根拠についての「正統」な「何か」，換言すると照合すべき根源的な存在というべきものがあると措定して，概念の定義づけを行うという思考自体についてカッシーラーは次のように疑問を呈する。

そもそもわれわれの論理的もしくは倫理的概念において言い表されるものは，それ自体において存在する客観的な内容であるのか，それともこれらの概念は実はわれわれが或る意味内容を恣意的に結びつける単なる言語上の記号にすぎないものなのか。同一性というもの，美というもの，正義というものが実際に存在するのか。それとも絶えず変化し交代するわれわれの「幻想」の流れに拉し去られぬ動かざる真の同一な存在を見出そうとするわれわれの努力は，所詮徒労に終わるものなのか。これらの概念が指向して，これらの概念がそれに対応する或る根源的な形式が存在するのか。それともこのような存在を問題にすること自体が，誤解と自己瞞着を含むのか。［カッシーラー下 2003：69 傍点や括弧は訳者］

すなわち，啓蒙主義は伝統的な思考方法や社会的な習慣を乗り越えるために生まれた思想であるが，啓蒙主義自体もその正統性を呈示するためには依拠すべき「真理」を打ち立てる必要があったのである。つまり，啓蒙主義もプラトンのイデアのように真実の観念が実在するものとして，それとの照合により様々な概念のありようについてその正しさを判断するという伝統的な哲学的思考の範疇におさまっており，目新しい部分がないと考えうるのである。

そうだとすると，これまでの思考形態の焼き直しに過ぎない啓蒙主義が個人の自由を無限に促進すると，その先には安寧の場所はあるのか，自由の終局は何の目的もない虚無の思想的空間に過ぎないのかという問題が導出される。このアポリアを乗り越える方途はあるのか。カッシーラーはルソーによる啓蒙主義の推進における「倫理的秩序」に着目し，次のように述べる。

つまりわれわれがルソーに見出すものは単なる感情的・情緒的な要素ではなく，真の思想的・道徳的な確信なのである。ルソーの「感情主義」において出現したものは単なる「感受性」ではなくて，一つの倫理的な力，すなわち新しい倫理的意志に他ならない。このような基本的性格のために，ルソーの「感情主義」は全く異質な人々の魂を捕らえてそれを魅惑することができた。現にそれはドイツにおいてはレッシングやカントのように情緒的とは正反対の思想家にも影響をおよぼした。啓蒙主義がこの自らの最も危険な敵の攻撃を支え抜いて，自分たちが持っている最も固有な特性をこの敵の手から守り通したという事実ほど，恐らく啓蒙主義のもつ実力とその世界像の体系的一体性をいみじくも表すものはない。［カッシーラー下 2003：127–128 括弧は訳

者］

よって，啓蒙主義の行き着く先は，啓蒙主義の思考方法が伝統的哲学の範疇を出ていないからと言って，空疎なものであるわけではなく，むしろこれまで備えていた倫理的な統一への強固な意志を確信させる地点だということである。啓蒙主義は，これまでの思考方法の刷新にその真髄があるのではなく，本来内在していた，世界像の倫理的体系化という作用にこそあると再認識されたのである。

3　宗教領域における二項対立

「啓蒙」は宗教領域に何をもたらしたか。ウートラムがピーター・ゲイによる「近代的異教」，キース・トマスによる「世界の脱魔術化」という啓蒙の捉え方や，ヘーゲルの議論を参照しながら，「啓蒙」は「人間の自己認識の決定的な側面」としての「絶対的で霊的なもの」との関係性を破壊したと述べている［ウートラム 2017：171–173］。つまり，啓蒙主義の台頭により，人間が意思決定を行う際の依拠すべき規範や，価値判断の基準ともいうべき人間を超えた存在，換言すれば，人間の外部に絶対的なものとして存在していると考えられていた規範や位階秩序に対する疑念が膨れ上がり，全ての価値基準設定は各個人によって行われることとなった。よって，宗教領域における啓蒙の二項対立は，社会の安定を図ろうとする政治体制の下で各人の信条をどこまで認めうるかという問題に連なる。

18 世紀には宗教理念に基づく権力により国を統一するという統治方法が限界を迎えていたことに加え，啓蒙主義の影響により「宗教的寛容」という概念が生まれ，宗教による差別的な扱いをなくしていく動向が生じていた。一見すると理想的な社会への布石とも思えるが，この「宗教的寛容」政策が政治体制との関係でどこまで実効性を持ちうるのかという問題が浮上した［ウートラム 2017：176–179］。すなわち，ウートラムが「寛容政策を実施した支配者は，自らの正当性を，宗教的な認可以外の何かに基づかせなければならなかったであろう。このように寛容論争は，究極的には，王位の本質そのものについての論争だった」［ウートラム 2017：192］と述べる通り，宗教に対する「寛容」を掲げながらも遂行される，君主による政治支配の安定性の保持と拮抗する思想信条の自由をどこまで認めるかということである。

このように，個人の内面的な信仰に関わる宗教領域においても，啓蒙主義は一時的に各個人の思想信条の自由をもたらしたが，実質的な政治的支配権力による制限との対立を生

ぜしめた。これは前節の政治的領域と同様に社会的事象に関わるものであるから，ここでも，宗教的領域における二項対立を生み出した，啓蒙主義の哲学的要素を抽出してみたい。既に述べたように，啓蒙主義は人間の外部たる宗教の霊性を瓦解した。そのような外部には何が内在しているのか，つまり，人間よりも高次の存在とされているものはいかなるものであるのかを検討する必要がある。ここで，ホルクハイマーとアドルノの議論を見ると，彼らは「啓蒙の自己破壊」として啓蒙が極限まで進行した状態について次のように述べる。

> 進歩の持つ破壊的側面への省察が進歩の敵方の手にゆだねられているかぎり，思想は盲目的に実用主義化していくままに，矛盾を止揚するという本性を喪失し，ひいては真理への関りをも失うに至るであろう。［ホルクハイマー／アドルノ 2007：11］

すなわち，啓蒙主義が普及する前に人間存在とつながりのあった，「真理」の存在が啓蒙主義により相対化され，思想の深化という人間がより高次の状態を目指す活動の契機自体が消滅させられたのである。ここで看過してはならないのは，真理の実在性を問うことではない。着目すべきことは，啓蒙主義によって「真理」のような人間の外部，つまり人間を超えた存在への憧れを持ち続けるという人間本性のあり方を吟味することなく，すべての思想が平板化され，人間の哲学的な知的活動の自由を狭める結果となったということなのである。

さらに「啓蒙」による「真理」の対象化に潜在する問題点は，カッシーラーが「考察の重心が変化」と指摘しつつも［カッシーラー上 2003：258］下記のように述べる通り，思考の枠組み自体は，全くこれまでの伝統的哲学による思考方法から変化していないことにある。

> 以前は他を根拠づけていたものが今や根拠づけられるものの位置へ，これまで主に他を正当化してきたものが今や正当づけられるものの位置へと追いやられた。〈中略〉神学はもはや一方的に自らの尺度を他に押し付けるのとは逆に，他の学問領域から得られた根本的な基準，つまり自立的な精神的活力の総括としての「理性」が指し示す規範に自ら服するようになる。［カッシーラー上 2003：259 傍点訳者］

ホルクハイマーやアドルノも，「啓蒙」は「破壊的合理性」という万能の観念的な「外部」を手に入れたとしてあらゆる批判の根拠でありながら，批判を受け入れないという地位を

得たと指摘している。

> 啓蒙がそとからの抑圧に妨げられずにひとたび展開することになれば，もはや止まるところを知らない〈中略〉たとえ啓蒙に抵抗する勢力がどんな神話を持ち出してきたとしても，その神話は啓蒙に対して避難している当の破壊的合理性の原理への，信仰を告白していることになる。啓蒙はすべてを呑み込む。［ホルクハイマー／アドルノ 2007：28］

すなわち，霊性への信仰を破壊したとされる啓蒙主義こそが，何も信ずるに値する存在はなく何も信仰すべきではないという「信仰」に絡めとられていたと解しうる。よって啓蒙主義によってもたらされた思考の変化により却って，人間には自分の存在を超える者に対する信仰を求めるという本質的な傾向があるということが却って浮き彫りになり，これらを認めたうえでなければ信仰それ自体を対象化することができないといいうる。そして啓蒙主義も，このような思考の本質的状況により，人間の外部にある霊性や真理というものの存在に対する認識のありようを人間の内側から複製したに過ぎなかったということが明らかにされたとみなしうる。

しかしながら，ホルクハイマーとアドルノの議論を参照して，啓蒙主義に希望を見出すことも可能である。彼らは，「運命という概念を消去したのは啓蒙だったのだが，啓蒙の道具である抽象作用その諸対象にかかわる態度は，個々の対象を清算してしまうという点で運命と異るところはない。」と，個別具体物に対する啓蒙の相対化という作用の側面について述べている［ホルクハイマー／アドルノ 2007：39］。確かに，啓蒙主義が単なる相対化という思考形態であると捉えることもできるが，それゆえに「運命」のような，予測不可能な事柄へ向かうという状況設定の端緒を準備すると解することも可能である。つまり，「啓蒙」には相対化により個別的具体物を曖昧化するという作用があり、これによってこそ生じる「運命」と同様の偶然性，不確定性が内包されており，啓蒙主義によってさらなる個別化への可能性も開かれるといいうる。

4　教育領域における二項対立

教育領域においては，啓蒙主義により，目指されるべき理想の人間の範型が大きく変化するか崩壊するかのいずれかの状況がもたらされる。教育領域における二項対立は，大ま

かにいえば，画一的な完成形に向けた指導を施すことが推奨されるのかということと，各個人が自らの成長の方向性を決めることを最大限に保障する枠組みを作るべきなのかということの間で，教育政策や仕組みを構築する段階で生じる。学校教育システムにおける「啓蒙」についての詳細な分析を行っている田中によれば，教育システムにおいて啓蒙主義はロゴスとパトスの衝突の現れであると，次のように指摘している。

> 近代学校は，啓蒙的アクティビズムによって設立・運営され，啓蒙的アクティビズムの担い手を産出する。啓蒙的アクティビズムによって教育の主体と客体が，さらには近代学校そのものが産出されるが，これとともに，教育の主体と学習の主体双方の破壊的開発もまた推し進められる。ときにはアクティビズムの一面的なロゴス支配を緩めて，受容性，敏感さ，ケア，傾聴，弱さなどのパトス面に目を向けることが称揚される。近代学校システムの〈中略〉構成員がアクティブに同調すればするだけシステムは円滑に作動し，この活動に関連する構成員の能力は成熟する。しかし忙しなく類型的な同調行動が繰り返されればされるだけ，構成員の残余部分は委縮し貧困化する。［田中 2021：19–20］

すなわち，学校システムのような安定性が要求される枠組みに啓蒙主義を導入しても，終局的には，目指すべき人間の範型としてのロゴス的側面と，啓蒙主義によって鼓舞された，教育システムから逸脱しようとする自由な個人としてのパトス的側面が常に対立するという緊張関係の常態化が起こるのみである。固定化されたシステムに組み込まれたロゴスとパトスはその本来的な思弁的活力を失い，システムを保持するための対立という作用を担うに過ぎない存在となる。

この教育システムのような、社会的な事象による啓蒙主義の二項対立に潜在する哲学的要素に着目すると，目指されるべき人間性というものの内実と，そもそも目指すという思想的な方向性は教育領域において妥当なのかということが問題となる。まず，目指されるべき人間性についてみると，完成された人間性を規定することは妥当かということが問題となる。富永は人間の無限の可能性を主張するコンドルセと，啓蒙へ疑念を抱くトクヴィルとを対比させ，啓蒙主義によって実現されたかに見える，教育活動を支える自由と平等によって生じる，人間の完成形について述べる。

> 諸条件の平等は人間の心のなかにかぎりない想像力を掻きたてることになる。こうし

> て人間の精神には完成の理想的な姿が形成されていく。ただしそれは想像力にもとづいたものであるのだから「追いかけても常に逃げていくという」姿である。［富永 2011：259　括弧は著者］

すなわち，啓蒙主義により目指すべき範型を形成するという人間の内面的な活動自体は無限に可能になるが，完成形としての範型が可視化された瞬間にその範型は消え失せるため，完成形を措定することという教育的作用の本質を問い直すことを余儀なくされる。

次に完成形を目指すという思考活動を促すことは妥当であるかという問題については，北垣徹による次のような，コンドルセとコントの間における「啓蒙」についての連続と断絶という分析を参照したい。

> コンドルセにおいては，啓蒙としての教育は，反啓蒙としての宗教と対立する。ところがコントにおいては，啓蒙から反啓蒙に転向することなく，教育はそのまま宗教とつながっている。したがってコンドルセからコントにおいて，啓蒙という点では連続しているようにみえる一方で，他方では，当初は対立していた教育と宗教が対立物ではなくなり，その点では両者のあいだは断絶してみえる。［北垣 2011：308–309］

すなわち，教育には反啓蒙的な宗教的側面があり，価値観の固定化という作用と親和的であるため，これは完成形を目指すという思考活動の促進に重なる。そうだとすると本来啓蒙により，従来の価値観からの脱却という思考活動を誘うべきと謳う教育的活動には，反啓蒙になりうるという両義性があるということであり，「啓蒙」概念を通じて教育の哲学的要素たる「完成形を目指すという思考活動の促進」について妥当かどうかを判断すべきではないということが見てとれる。

それでは，啓蒙主義との関わりを通じてみた教育領域において，完成可能性への誘いという教育的テーゼは無意味な概念として浮遊させられるだけになるのであろうか。ここで田中による教育システムの生成性に着目した「ずらし」の概念を見ると，教育領域における啓蒙主義の二項対立について，哲学的要素を純粋に抽出するという糸口を見出すことが可能になる。

> 技術的合理性の支配を〈ずらす〉こと，啓蒙への自発的同調から自省的に〈距離を取る〉こと，そして現にある葛藤から目的合理性，技術的合理性を脱した生成的な「無

の場所」を創出して，価値合理性，解釈学的合理性などへ向かう〈芽を活かすこと〉はできるかもしれないのである。［田中 2021：398 括弧は著者］

すなわち，システム化された教育に真正面から抵抗するのではなく，外側へ向けていた葛藤を自己の内側に移行させ，あるべき価値の追求ではなく，価値を創出する場それ自体を生み出すような思考の柔軟さを持つことが推奨される。価値を新たに生成できる場を自分の思考の内に生み出すことができれば，終局的には教育システムを超えた，構成的な価値を目指すという哲学的な知的活動が促進され,「目指すこと」それ自体の是非に関わりなく，絶えず問い直すという姿勢は永続すると考えられる。

5　むすびに代えて―思想史的示唆

これまで見てきたように啓蒙主義における二項対立は，一見すると時代や国による権力とこれに抑圧された個人との対立という単純な対立関係に基づくかに見えるものであったが，この対立の社会的な現象による影響を捨象することで,「啓蒙」自体に内包された矛盾を生ぜしめている哲学的要素に着目することが可能となった。

啓蒙主義の哲学的側面に着目した検討を政治・宗教・教育の各領域ごとに行ったことで，次のようなことが明らかとされた。まず政治的領域においては，政治権力と個人の権利が対立関係にあったが, この二項対立を生じさせた啓蒙主義の哲学的要素に着目することで,「啓蒙」の倫理的体系化という作用の重要性が明らかとなった。次に宗教的領域においては，自由を付与された信仰心の基盤としての霊性に対する考え方と，この信条に対する政治的な制限が対立関係にあったが,「啓蒙」に不確定性の要素があり，事柄の個別化という新たな可能性が開かれることが明らかになった。そして，教育的領域においては合理的な教育システムに組み込もうとする社会的圧力と，個人の内面的自由が求める人間形成との間に対立があった。しかし，啓蒙主義の抑圧と解放という両義的効力について，あえて結論を下さずに，これを超える視点を設定するような「啓蒙」の捉え直しにより，むしろ生成的な教育という新たな地点への道筋が開かれた。

ここで，各領域における啓蒙主義の二項対立の根底にある哲学的要素を踏まえても,「生成的」であるという規範定立のための依拠すべき外部を求めて彷徨うというジレンマに「啓蒙」は再び陥るともいいうる。それでは，このようなジレンマから逃れる術はないのであろうか。このジレンマからの脱出の方途として「終わりなき啓蒙」を模索する佐藤の議論

を最後に参照しておきたい。

> 自然の秘密を手に入れた啓蒙は，自然を自ら作り出すことができる〈啓蒙〉として完成されるが，しかしこれは同時に人間の残酷な無化という破局をも招来し得る。この破局からどうやって逃れるのか。この問いへの可能な答えとして，ヘーゲルの弁証法とは別の道筋（スピノザを分岐点とする道）を辿る啓蒙のタイプがある。〈ラディカルな啓蒙〉と呼ばれるべきこのタイプの啓蒙は，「構成」の無限性を基盤としている。［佐藤 2011：555 括弧は著者］

前節の田中による「ずらし」とも重なるが，啓蒙主義に本来備わっていた，新たな価値を対象化するという方法で思想的必然性を乗り越えるという思考方法自体を，これまでと異なった形で，従来の思想に飲み込まれながらも，価値を創造する構成的な場を生み出していく源泉に読み替えるべきであろう。これにより，啓蒙主義には新たな「新しい」価値の創造の可能性という偶然性をも内包されていると解しうる。よって、既に思想史上で議論が尽くされたかに見える、啓蒙主義のような概念についても、周縁部の事象を捨象して内在する哲学的要素の抽出と検討により、外側からの概念の捉え直しのみならず、内側からの根源的な含意の読み替えが可能になるという示唆が得られた。

引用文献

石川文康（1998）「啓蒙思想　2. ドイツ啓蒙思想」廣松渉他編『岩波哲学・思想辞典』，岩波書店，pp.423-424

泉谷周三郎（1998）「啓蒙思想　3. スコットランド啓蒙」廣松渉他編『岩波哲学・思想辞典』，岩波書店事典，pp.424-425.

ウートラム，D（2017）田中秀夫監訳，逸見修二，吉岡亮訳『啓蒙』法政大学出版局。

カッシーラー，E（2003）中野好之訳『啓蒙主義の哲学　上・下』筑摩書房。

北垣徹（2011）「コンドルセからコントへ―啓蒙の転換―」富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会，pp.282-316.

阪上孝（1998）「啓蒙思想　1. フランス啓蒙」廣松渉他編『岩波哲学・思想辞典』，岩波書店，p.423

佐藤淳二（2011）「「終わりある啓蒙」と「終わりなき啓蒙」」富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会，pp.550-583.

田中毎美（2021）『啓蒙と教育　臨床的人間形成論から』勁草書房。

富永茂樹（2011）「コンドルセ vs トクヴィル―≪無限の完成可能性」の概念をめぐって―」富永茂樹編『啓蒙の運命』名古屋大学出版会，pp.256-281.

ホルクハイマー，M，アドルノ，T.W（2007）徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店。